



【結果】325例中、偶発症の穿孔は2例0.6%。出血は25例7.7%であった。穿孔例はいずれも1.5cm未満のⅡa例で部位的に噴門と体中後壁であった。一方出血は25例7.7%を認めた。全例はclippingにて止血し、輸血や手術例はなかった。しかし出血のため、癌の浸潤範囲が不明瞭となった例は4例、止血操作のため、治療中止となった例5例。そのため癌残存は9例7.7%に認めたが全例は一週間以内に追加切除を行い、癌残存例はなかった。

【まとめ】EMR 325例中偶発症の穿孔は2例0.6%、出血25例7.7%を経験した。胃体上部は筋層が薄いため、局注を十分行い、分割切除が望ましい。出血は偶発症と言わないが癌残存の原因になるため注意を要する。EMRは徹底的なinformed consent、偶発症は迅速且つ適切な対応が重要である。

6 早期胃癌、胆石症を合併した胃 GIST の1例 (巨大な壁外増殖した胃神経鞘腫との比較検討)

星山 圭・西村 淳 (柏崎中央病院 外科)  
 石塚 大  
 吉村 朗・岩田 実  
 橋立 英樹・星山 真理 (同 内科)  
 金子 博 (長岡日赤病院 病理)

消化管 Cajal 間質細胞に由来する腫瘍を Gastrointestinal stromal tumor (GIST) と総称する概念が立てられている。われわれは最近早期胃癌、胆石症に胃 GIST を合併した症例を経験したので報告する。またこの症例と同じ様な形態を呈し有茎性の胃壁外に増殖した巨大な神経鞘腫も経験したので比較検討した。胃 GIST 症例は75歳の男性、主訴は心窩部不快感。胃体下部、後壁の陥凹型早期胃癌と胆石症の診断で手術を行い偶然胃体部大弯後壁の漿膜側に4.5×2.0×2.0cm 芋虫状の腫瘍を発見し胃切除術に胆嚢摘出術を施行した。病理組織検査では早期胃癌は sm, tub 2, 芋虫状腫瘍は紡錘形の腫瘍細胞に核分裂が豊富に見られ、CD34, 染色陽性の悪性度の低い smooth muscle

type GIST であった。早期胃癌に合併した GIST は稀と思われる。胃神経鞘腫例は67歳の男性、著明な体重減少のため精査、MRI, CT, エコーで膵嚢胞腺腫(癌)の診断で手術。胃壁外に有茎性増殖した症例は極めて稀で本症例が5例目である。

7 胃の pyogenic granuloma の一例

小澤 拓也・早川 晃史 (新潟こばり病院 消化器内科)  
 武井 伸一・田代 和徳 (新潟大学 第三内科)

症例は65歳、男性。平成11年11月9日より労作後に胸部圧迫感が出現、次第に軽度の労作でも頻回に出現するようになり、更に言葉がなかなか出てこない、右手のふるえ、立ちくらみなどの神経症状も加わった。

12月1日、入院精査にて、胸部症状は貧血による相対的な心筋虚血によるもの、また神経症状は貧血により顕性化したモヤモヤ病と診断した。

貧血の原因精査にて上部消化管内視鏡検査をしたところ、胃体中部小弯に発赤調、易出血性の10mm大の亜有茎性ポリープを認めた。同部からの慢性出血が貧血の原因と考え、12月21日 EMR を施行、ポリープは完全切除しえた。病理組織学的には大小無数の毛細血管の増生・集簇と炎症細胞浸潤がみられ、pyogenic granuloma と診断された。

胃の pyogenic granuloma は極めて稀で、本症例は EMR 後、胸部症状・神経症状は出現せず、貧血も軽快している。

8 急速な発育を示した胃の非平滑筋系肉腫の一例

福原 康夫・古川 浩一 (済生会新潟第二病院 消化器科)  
 真船 善明・太田 宏信  
 吉田 俊明・上村 朝輝  
 猪又 英子・坪野 俊広  
 石崎 悦郎・相場 哲朗  
 川口 正樹 (同 外科)  
 武田 敬子 (同 放射線科)  
 石原 法子 (同 病理)

症例は69歳の男性。腎癌術後の経過観察中に腹腔内腫瘍を指摘され、精査のために当科に入院し